

simc News Letter

Sendai International Music Competition

2025年6月3日号

仙台国際音楽コンクールニュースレター

第9回仙台国際音楽コンクール【開催日程】ヴァイオリン部門 2025.5.24 (土)～6.8 (日) ピアノ部門 2025.6.14 (土)～2025.6.29 (日)

第9回仙台国際音楽コンクール・ヴァイオリン部門レポート

セミファイナル（5月30日～6月1日）レポート

音楽評論家：山田治生

ヴァイオリン部門のセミファイナルは、5月30日から6月1日まで開催され、12名が出場した。課題曲は、メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲またはドヴォルザークのヴァイオリン協奏曲、ブラームスの交響曲第1番第2楽章の最後の部分（コンサートマスターの席で演奏）、モーツァルトの「カッサシオン K63」からアダージョ（指揮者なしで、コンサートマスターの席から弦楽合奏をリード）の3曲。共演は広上淳一指揮仙台フィルハーモニー管弦楽団が務めた。

5月30日の一人目のツァオ・ジャーチェン（中国）はドヴォルザークを選択。ドヴォルザークのヴァイオリン協奏曲は第1楽章冒頭に2度、非常に高い音域の音（ミとラ）を当てなければならないという難関があるが、彼は些かうまういかなかった。全体的に音が硬く、音楽も堅かった。

パク・ソヒョン（韓国）もドヴォルザークを演奏した。ヴァイオリンの鳴らし方がよく、良いヴィブラートを持っている。音楽の表情も細やか。強音も粗野にならず、演奏の精度が高い。第2楽章の旋律はヴィブラートをたっぷりかけて濃密に歌う。モーツァルトでは美音が際立つ。弓や身体でのオーケストラへの合図も良い。

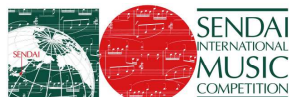
キム・ハラム（韓国）もドヴォルザークを演奏。弓の毛が弦に吸い付くような、艶のある良い音の持ち主。身体の動かし方が大きい。第2楽章のカンタービレではヴィブラートの幅が大きくて、音程があまくなっているようにも感じられた。ブラームスでは身体を動かしてスケールの大きなソロを披露。

キム・ヒョンジ（韓国）はメンデルスゾーンを弾いた。滑らかな音。先に進んでいくのも良い。音は良いが、ソリストとしての音楽のスケールの大きさに物足りなさを感じた。ブラームスやモーツァルトでは、ソロがオーケストラの音に溶け込んでいるのが良いと思った。

5月31日の一人目のムン・ボハ（韓国）はドヴォルザークを選択。彼女は、力みなく、ヴァイオリンを美しく鳴らす。温かみのある音。もう少し、エスプレッシーヴォの表現やスケール感がほしいところもあった。ブラームスでは、よく通る清らかで美しい音を披露。彼女の音はモーツァルトにも合っていた。

レイ・ハイルイ（中国）もドヴォルザークを弾いた。音がよく出ている。一音一音をはっきりと弾いていたが、ヴィブラートをかけ直すことで音楽の流れが阻害されているところがあるように思った。それでもメリハリがあり、ハッとするような弱音もあった。ブラームスはオーケストラをリードするかのように積極的。モーツァルトでは美しい弱音表現もあった。

裏面に続く。



シン・ジェイク・ドンヨン（韓国）はメンデルスゾーンを弾いた。自己主張の強い演奏であったが、演奏が些か雑で、精度が低いように思われた。

ヴィルモシュ・チコシュ（ベルギー／ハンガリー）もメンデルスゾーンを弾いた。繊細な演奏。力むことなく、良い弱音表現を用いて、密度の濃い、室内楽的な演奏を聴かせてくれた。たとえば、第2楽章で主要主題が回帰するところでは楽譜通り pp で歌っていた。自らは指揮台の近くに立ち、指揮者やオーケストラと良いコミュニケーションを取ろうとする。それに広上もよく応えていた。音楽的内容は12名の中で最も成熟しているように感じられた。ただ、他の出場者に比べて、明らかに音が小さいという印象を持った人もいたであろう。ブラームスはオーケストラと溶け合うようなソロであったし、モーツァルトも、ソロというよりは、室内楽的。

6月1日の一人目は、ジャン・アオジュ（中国）。メンデルスゾーンを選択。彼は艶のある良い音を持っているが、音程の精度は今一つ。第1楽章の後半のテンポの変化で大きなミスをしていた。モーツァルトでは妙な力みもあった。

フィオリーナ・キサラ・イヨク（アメリカ／日本）もメンデルスゾーンを弾いた。ヴィブラートのよくかかった大きめの音。音楽のスケールが大きく、ソリストに合っているように思われた。多少粗削りだが、若々しい情熱には好感をもった。協奏曲でのソリスト的な演奏とは打って違ってブラームスでもモーツァルトでもオーケストラとコミュニケーションを取って、一体となるように務めているように感じられた。

的場 桃（日本）もメンデルスゾーン。第1楽章から張りのある、引き締まった良い音。ボウイング（弓の上げ下げ）にも独自のものがあり、個性の強い演奏に感じられた。舞台上でよく動き、オーケストラの奏者と直接アイコンタクトを取ったりする。ブラームスではオーケストラを圧するようなソロを披露。

リ・ジンジュ（中国）もメンデルスゾーンを弾いた。伸びやかで美しく澄んだ音。メンデルスゾーンに合っている。表現が自然で音楽の精度も高い。第2楽章ではよく抑制されたカンタービレを聴くことができた。完成度の高い演奏。ブラームスではオーケストラによく溶け、ヴァイオリン、ホルン、オーボエのソロのバランスが良い。モーツァルトの「カッサシオン」も繊細で優美で、即興での装飾的なフレーズも魅力的だった。

結果として、ファイナルに進んだ出場者6名中、4名がドヴォルザークを弾いたのは興味深い。メンデルスゾーンで繊細さで勝負するよりも、ドヴォルザークで音を出して勝負する方が良い評価を得やすかったといえるかもしれないが、ドヴォルザークを弾いた人に音のよく出る優秀な奏者が多かったのだろう。ブラームスもモーツァルトも各出場者が良い準備をして良い演奏を聴くことができた。モーツァルトではもっと大胆な装飾を入れるような個性的な演奏も聴きたかったが。